

論文 | Original Research Article

「記憶地図」を用いた奥尻島青苗言代主神社例祭における災害伝承のあり方

Utilizing Natural Disaster Experiences using Memory Maps:

The Annual Aonae Kotoshironushi Shrine Festival on Okushiri Island



蟬塚咲衣（北海学園大学大学院文学研究科日本文化専攻修士課程・院生）

Sakie SEMIZUKA Graduate Student, Graduate School of Letters, Hokkai-Gakuen University

摘 要

本研究では、1993 年の北海道南西沖地震の被害を受けた奥尻島の青苗言代主神社例祭の被災前後の祭礼景観を、GIS を用いた「記憶地図」の作成によって可視化し比較した。その結果、以下の 2 点を明確にした。1 点目は、文化歴史的側面に配慮した復興計画は実現できず、例祭の臨場感が損なわれたために、災害以前の祭礼を若い世代へ継承する意義や価値については、後世の人々が祭礼の将来を考えるための判断材料を残し、復興時には災害以前の暮らしとの連続性に注目することの重要性である。2 点目は、いずれ生じる自然災害への対応を見据えた際に、公的な行事よりも、地元住民が自主的に行う祭礼と災害を結びつけて災害継承を行うことの有効性である。

I 研究の背景と目的

1. 研究の背景

1993 年 7 月 12 日午後 10 時 17 分に発生した北海道南西沖地震（以後、震災とする）から、27 年が経過した。奥尻島の南端に位置する青苗地区¹⁾で行われている青苗言代主神社例祭（以後、例祭とする。その他の先行研究で挙げられている事例や、神社及び神仏と関係が弱いイベント化された催しなどを祭礼とする）は、震災以前より住民に親しまれてきたが、震災による甚大な被害によって神社社殿や祭器具をほとんど全て消失し中止に追い込まれ、6 年間の休止を経て復興を遂げた。青苗地区の例祭は、島内では神輿と山車の双方を巡行させるといった伝統的な形態を保っているが、巡行構成や巡行ルートは震災前後で大きく変化していることが判明した（蟬塚ら 2019）。

奥尻町では、震災で写真などの資料が消失したことや、町史（奥尻町史編さん委員会 1969）などに例祭に関する記述が少なかったことから、例祭

の復興時に多大な苦勞を要した。その経験を踏まえ、今後も予想される災害時に対応すべく、「島の歴史を、後世に残る資料となるよう記録していきたい」という奥尻町の意向に賛同し、同町の学芸員（津波館／稲穂ふれあい研修センター）と共に、奥尻島の各地で親しまれている例祭について GIS（地理情報システム）を用いてデータ化し、場所と記憶の結びつきに着目してアーカイブする活動を継続中である（佐々木ら 2019; 蟬塚 2019; 蟬塚ら 2019; 蟬塚 2020; 蟬塚ら 2020; 手塚 2020）。

地元住民の証言からは、「青苗の老若男女で楽しめる行事はこの例祭だけ」²⁾や、「昔のしきたりを覚えている人もあまりいないので、若い人たちと一緒にやって伝授しつつ残していきたい。震災や祭りについて若い世代にしっかり語り継がれているのか心配」³⁾など楽しい例祭を継承していきたいという想いに加え、意識して伝承しなければ消失するという強い危機感がうかがえる。しかし、例祭が震災以前の形に表面的には復興したように見えても、山車の減少や参道縮小による迫力の低

下を訴える声が多く見られるのも事実である。それらは、震災前の参道と鳥居や神社周辺のまちなみといった神社景観と強く結びついている。それらの証言が具体的に何を表しているのかは不明だったため、本稿の中でそれを明確にできればと考えている。

災害以前の例祭を若い世代へ継承する意義や価値に関しては、以下のような先行研究が重要である。田仲（2016: 61）は、震災を経た無形民俗文化財の継承について、後世の誰かが復活を望んだ際の「材料」を残すことの重要性を指摘している。阿部（2019: 44）は、歴史・文化遺産の保存に関して考察する中で「地域の資料を残す意味」として、被災した状況を起点に復興を語るのではなく、以前の暮らしが震災によってどのような影響を受けたのか認識し、そこからこれからの歩みを考えることの必要性を述べている。これらの研究は、文化遺産の変化を受け止めながらも、災害以前から長年慣れ親しんできた暮らしとの連続性に着目することの重要性を伝えている。

青苗地区の例祭において震災後に制作された神輿には、地震が起これないようにという願いが込められた龍と鯰の彫刻が施されている。このように、青苗地区の例祭は、例祭そのものによって震災経験を継承している稀有な事例であり、地元住民らは「彫刻について言い伝える機会が年に1度例祭時にあり、世界に1つしかない由緒あるものだ」と島外の人たちも含めて知らない人たちに教えている⁴⁾、「著名な彫刻職人が彫ってくれた彫刻と、その意味をこれからも語り継いでいってほしい」⁵⁾などと述べ、震災継承の必要性が意識されている。したがって、神輿の彫刻以外にも「記憶地図」を活用して震災を伝える可能性を追求することで、より充実した震災継承を図ることができる⁶⁾と考える。

祭礼と災害を結びつけた試みの思想や課題に関しては、以下のような先行研究がある。このような娯楽的な行事と防災を組み合わせた取り組みと

して、まず兵庫県上郡町赤松地域において25年ほど前から続く催しである「白旗城まつり」がある。ひょうご震災記念21世紀研究機構と消防庁の支援のもと、「まつり」の参加促進を名目にした高齢者避難訓練が実施された。高齢者住民らの実態把握に繋がるなどの効果が得られた一方、「まつり」に避難訓練を兼ねたことによる趣旨の理解不足といった課題が挙げられている（ひょうご震災記念21世紀研究機構 2019: 130-153）。次に、黒崎（2019: 231-233）が取り上げている、東京ときわ松町会と渋谷2丁目町会が合同で2010年ごろから行っている年中行事の「七夕パレード」では、2016年7月にイベント行事のパレードに続いて、放水訓練や防災用品の説明といった防災訓練を行った。しかし、疲れた子どもたちが帰ってしまうなど、開催日時や防災訓練の取り入れ方について課題が残った。相澤（2005: 73-74）は、地藏祭祀が阪神淡路大震災を経て変容を遂げながらも、震災の記憶を固定化し、想起させることが目的の震災モニュメントとは異なる形で維持・継承されていることを明らかにしている。しかし、新たな祭祀者の参入によって、かつての祭祀の意味が若い世代に継承されないまま地藏祭祀の記憶が変化し、震災に関連づけた意義付けが後退しているという課題も垣間見える。また、三木（2020: 43-67）が取り上げている「ふくいまつり」も祭礼と災害（慰霊祭）を結びつけた事例の1つである。戦災・震災（福井地震）犠牲者の慰霊祭や市民運動会、花火大会などが合わせて行われていたが⁶⁾、慰霊祭はその後「福井城址お堀の灯り」という別日程の協賛行事に分離した。そのため、同書では惨事の記憶継承には、「公」による試みよりも「民間」による取り組みの方が、継続性の効果が高いと指摘している。

上記のような、行事と防災を組み合わせる試みの思想について、渥美（2014: 218-226）は「減災と（声高に）言う減災」に対比し「減災と言わない減災」と名付け、日常生活の中で楽しみながら学ぶことが、防災意識の向上に効果的であると述べて

表 1 祭礼を対象とした「記憶地図」の先行研究と本研究の目的

	災害との 関わり	主要目的	波及効果
矢野ら2017	無	山鉾巡行景観復原	地域振興
河角ら2017	無	景観意義の解明	地域景観の維持
板谷ら2015	有	被災前渡御復原	祭礼復興支援
板谷ら2017	有	被災前渡御復原	祭礼復興支援
谷端ら2018	有	被災前後の渡御経路比較	祭礼復興支援
蟬塚ら2019	有	被災前後の巡行経路比較	祭礼継承
蟬塚2021	有	被災前後の祭礼景観の比較	災害継承

いる。

2. 研究の目的

近年、祭礼や民俗芸能などの質的な情報を可視化する際に、人々の記憶を地図上に載せる「記憶地図」という手法が着目されている。「記憶地図」とは、GIS を用いて証言と位置情報を結びつけて地図上に可視化するものであり、これまで量的な情報として取り扱うことが難しかった巡行ルート of 復原や個人が有する記憶などを共有することが可能になった。とりわけ、2 次元的地図として見るだけでなく立体的な視点で捉えることで、人々とまちなみ・景観との関わりや意味について考察することができる。文化面の復興・継承に有用であると期待されており、本稿でも「記憶地図」の利点を活用したいと考える。

祭礼を対象とした「記憶地図」の先行研究と本研究について、主要目的と期待される波及効果をまとめたものが表 1 である。表 1 の上 2 つの研究は災害と関わりのない事例であり、下 5 つは災害に関わる事例である。矢野ら (2017) は、既に山鉾巡行が失われた松原通の祭礼景観を「記憶地図」で復原することが主要目的であり、その結果がいずれ地域振興に資することが波及効果として期待されている。河角ら (2017) の主要目的は、まちづくりを考える際に地域の歴史を振り返るため「記憶地図」を用い、その地域にとっての景観の意義を明らかにすることであり、それによる波及効果

として地域景観の維持に繋がるとされている。板谷ら (2015) は、主要目的である被災前の祭礼に関する「記憶地図」の作成を通じ、その効果として祭礼復興を支援する手法を提案した。板谷ら (2017) では、被災によって休止となった祭礼が復興する際に、被災前の祭礼情報を記した「記憶地図」が実際に活用され、復興時に祭礼の次世代継承を支援する機能を有することが指摘された。谷端ら (2018) は、「記憶地図」を用いて被災前後の神輿渡御の比較を行い、その効果として被災地の復興過程において渡御が復興にどのような役割を果たすのか明らかにしている。蟬塚ら (2019) は、「記憶地図」をもとに被災前後の巡行経路の比較を行い、変化の要因を明らかにすることで祭礼継承の意義付けを一定期間が経過したあとで再確認している。

以上の先行研究を踏まえ、本稿では、「記憶地図」を作成することで被災前後の祭礼景観を比較し、詳細な変化を可視化することを主要な目的とする。奥尻島は震災から長期間経過しており、既に復興段階から脱しているため、祭礼の復興支援よりむしろ災害継承に焦点を当て、災害への対応力を高めておく必要がある。震災前の例祭を知らない世代が年々増加する中、例祭に関する知識や復興経験といった記憶が若い世代に継承されず消失することは、いずれ生じる災害へのレジリエンス力の低下や、例祭の継承をより困難にすることが懸念される。また、現在も震災前の姿への復興は達成されていないことから、過去の例祭を見据えて今

後の例祭のあり方を考えることができる。災害からの復興以降のみに注目するのではなく、地域住民が楽しみにしている例祭に毎年関わってきた過程において災害以前から培ってきた経験や知識の連続性を尊重したい。青苗地区の地域住民が集う楽しい年中行事の中で災害の記憶を共有し継承するユニークな形を維持していることから、今回作成する「記憶地図」が例祭と結びついた災害継承を円滑にする効果も提示する。

II. 調査方法と調査対象地

1. 調査方法

筆者は、青苗言代主神社例祭の開催期間である2018年8月12～14日と2019年8月12～14日に、青苗言代主神社（以後、神社とする）社殿内での神事への参加、巡行の調査、戸別訪問を行い、例祭に関わる3つの組織（氏子総代、恵比須山協賛会、青苗みこし保存会）のメンバーや、青苗地区や米岡地区の住民、帰省した元島民などに聞き取り調査を行った。2019年3月25日にはGISによる例祭の巡行ルートに関する分析結果を3組織のメンバーへ報告すると共に、聞き取り調査を行った。2020年9月30日～10月2日にかけては、住民に神社周辺の制作途上の「記憶地図」を示しながら聞き取り調査を行った。被調査者の人数は、同一人物を除き計58人である。

GISに関しては、Esri社のArcMap（10.8）を使用した。各図の作成方法に関して述べる。図1の地図は、国土地理院の電子国土基本図（地図情報）を用いた。図2の地図は、政府統計の総合窓口e-Statの「境界データ奥尻郡奥尻町」に、奥尻町提供の「行政区別集計表（2019年10月31日集計）」の人口データを比例シンボルで表した。図3-a～dの縮尺は1/6500である。図3-a～cの地図は、国土地理院発行の旧版地形図1/25000「青苗」（1973年測量、1984年測量、1996年測量）を用いて約4倍に拡大した。それらを画像データ化した後、GIS上で

地図を重ね合わせるために位置情報を付与するジオリファレンスを行い、具体的な解析を行うために新たな画像データを生成するレクティファイを行った。図3-dの地図は、国土地理院の電子国土基本図（地図情報）を用いた。図4-a,bの縮尺は1/8000であり、字の境界に関しては図2同様に「境界データ奥尻郡奥尻町」を用いた。図4-aの写真は、国土地理院の空中写真（1976年CHO7616-C5-16）を図3-a～c同様にGISデータ化し、図4-bの写真は、国土地理院の電子国土基本図（オルソ画像）を用いた。図5-a,bの縮尺は1/1000である。図5-aの地図は、奥尻町青苗支所提供の1987年の住宅地図を図3-a～c同様にGISデータ化した後GISのエディター機能を用いて建築物や道路をトレースした。図5-bの地図は、『ゼンリン住宅地図 北海道奥尻町（2016:27-28）』を図3-a～c同様にGISデータ化し、建築物や道路をトレースした。なお、図3～5のシェープファイル作成に関しては、神社、火点、山車の保管場所はポイント形式、巡行ルートと道路はポリライン形式、被災地域、復興事業、神社、鳥居、御神輿収納庫、建築物はポリゴン形式を用いた。

2. 調査対象地

奥尻島は北海道の南西沖に位置し（図1）、島の海成段丘は標高500m超の神威山をはじめ11面に区分されている⁷⁾。2019年の奥尻島全体の人口は2,470人、世帯数は1,406世帯である⁸⁾。最も多くの人口を有していたのは1962年の8,217人で、現在までに7割ほど減少しており、さらに近年も減少傾向にある（奥尻町役場 2003:209-210）。年齢別のデータによると、奥尻町では70歳以上の割合が30%、20歳未満が11%であり、少子高齢化の問題を抱えている⁹⁾。

島内は10の字と16の地区に分かれている（図2）。そこに人口のデータを可視化したものが図2であり、奥尻地区と青苗地区に人口が集中していることが読み取れる。行政面に関しては、島の東

側中央に位置する奥尻地区には、奥尻町役場や海洋研修センター（図書室・奥尻町教育委員会事務局）などがあり、南端に位置する青苗地区には奥尻町青苗支所がある。交通面に関しては、奥尻地区にフェリーターミナルがあり、一方の青苗地区は奥尻空港のそばにあることから、共に島の玄関口としての側面を有する。教育機関に関しては、震災直前の 1989（平成元）年には小学校 5 校、中学校 2 校、高校 1 校が存在していたが（奥尻町役場 2003: 437）、現在は小学校が青苗地区に 1 校、宮津地区に 1 校、中学校と高校が赤石地区に 1 校ずつある。また、島の中で奥尻地区と青苗地区にのみ駐在所、郵便局、コンビニが 1 件ずつあるなど、島内を代表する 2 大地区の様相をなしている。文化施設に関しては、島の北端に位置する稲穂地区に自然史・歴史・民俗・考古資料を扱う「稲穂ふれあい研修センター」があり、青苗地区には震災を伝える「津波館」があるが、双方共に観光客が主な利用者であることから、観光のオフシーズンである冬期は閉館している。例祭に関しては、奥尻地区と青苗地区のみ現在も巡行を行っているが、奥尻地区の奥津神社例祭では少子高齢化を理由に既に神輿渡御を取りやめ、山車のみの巡行となっている。巡行の際、奥尻地区は島に駐在している航空自衛隊の協力も仰ぐのに対し、青苗地区はできるだけ地元住民で行おうとすることや、駐在所の警察官が神輿担ぎに参加する慣習があること、巡行時に拡声器など電子機器を使用しないなど、奥尻地区の例祭とは参加者や巡行スタイルに大きな相違が見られる。

青苗地区は島の南端にあり、標高 30m 程度の更新世海成段丘（以後、高台とする）と、海岸沿いに広がるおよそ 10m 以下の完新世海成段丘（以後、低地とする）に分かれる。低地は 6~8m の上位面と、2~3m の下位面で構成されている（三好ら 1985: 598-601; 奥尻町役場 1996: 210）（図 3）。青苗地区東側の低地下位面には、住宅密集地が広がっていたことから、震災時に津波による大きな被

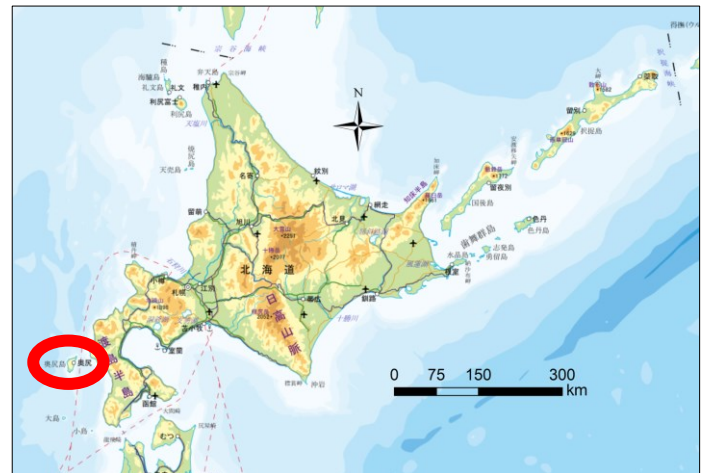
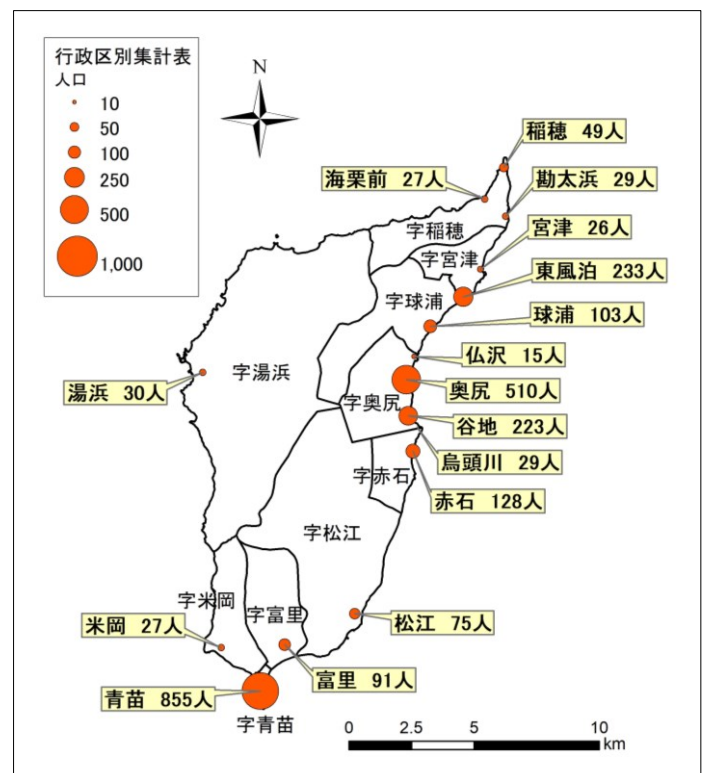


図 1 北海道全域における奥尻島の位置
（電子国土基本図 地図情報：国土地理院）



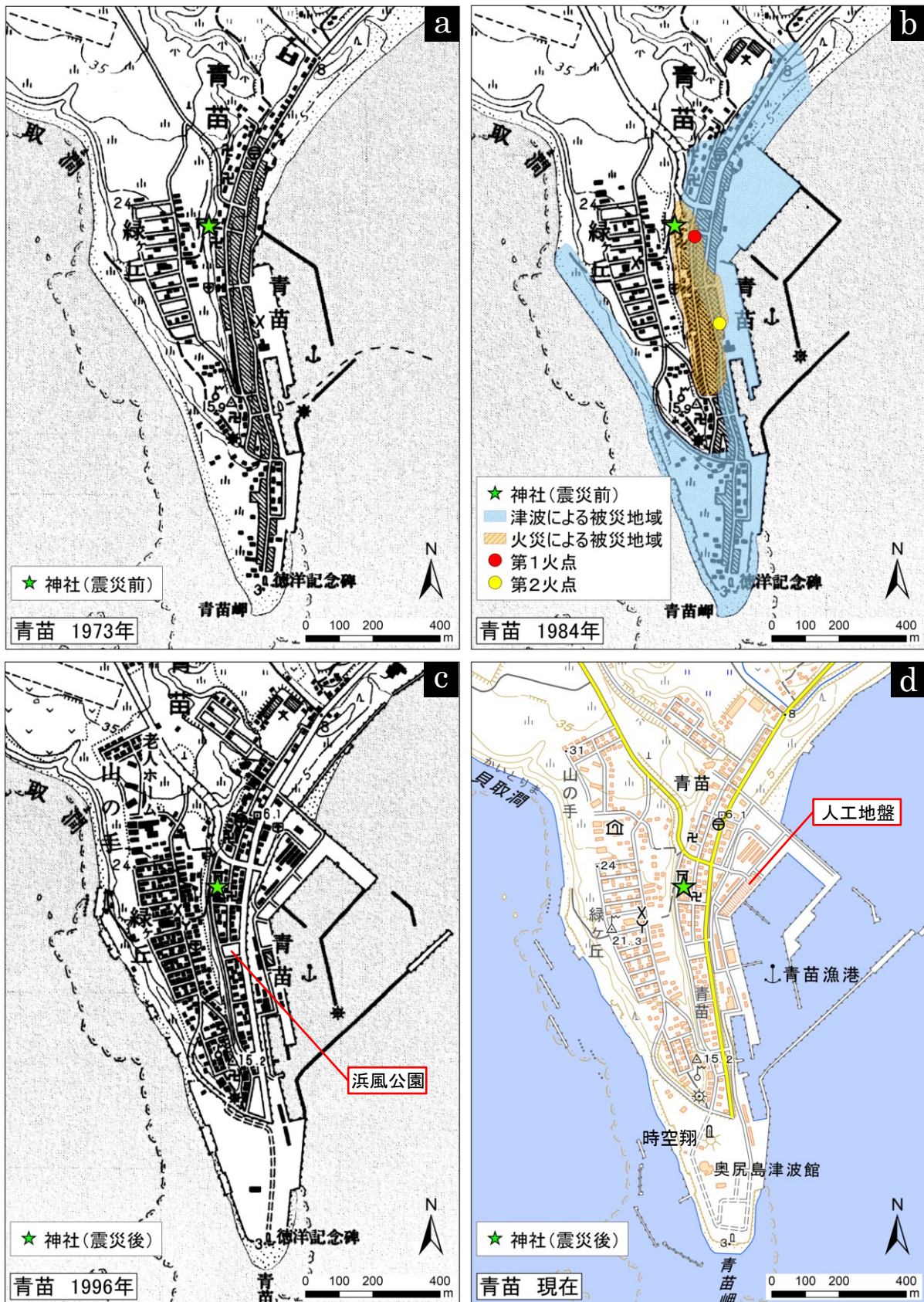


図3 青苗地区の変容

(a~c 旧版地形図：国土地理院、d 電子国土基本図 地図情報：国土地理院)

人口は増加しており、住民が他字に移転したことがわかる¹²⁾ (蟬塚ら 2019: 168)。地区の主要産業は水産業であったが、震災後に漁業従事者が14.7%減少した (安藤ら 1996: 17)。

図 3-a~d は、1973 年から現在までの青苗地区を比較したものである。現在に近づくほど、東側沖の防波堤が延長している。最も震災直前に近い b の地図には、津波と火災による被災地域と、火災が発生した 2 箇所の火点を表示した (全国消防長会 1994: 73-74)。下位面は津波浸水域に相当し、上位面は津波被害を免れたが火災による被害を受けた。地震津波による被害だけでなく、火災が追い打ちを掛けたことによって、被害は想定以上に拡大した。神社は第 1 火点付近に位置し類焼によって焼失したが、1995 年に同じ場所に再建されている。

震災前後の地図である b,c を比べると、震災後は東側低地部の南北を通ずる道路が新たに整備・拡幅された。また、a,b には、「総描建物 (大)」¹³⁾ の表示があり住宅が密集しているが、c,d には見られないことから、復興計画により密集度が緩和されたと考えられる。c では、岬の先端 (下位面) は非居住地域となったため、住んでいた住民は高台に移転した。また、西側の高台やその北側の内陸に住宅が増えている。東側低地上位面の中央には人々の憩いの場所として浜風公園が作られ、震災後 2000 年から青苗町内会主催の夏祭が開催されている (明上 2003: 349)。

最も新しい d の地図には、青苗漁港区域内に 2000 年に建設された、海拔 7.7m の人工地盤「望海橋」があり、地震による津波が発生した際にほぼ同じ高さに嵩上げされた主要道道奥尻島線 (39 号線) に即座に避難できるようになっている¹⁴⁾。人工地盤の 1 階にある屋根付きの作業場は、毎年 7 月に行われる「室津まつり」の会場となるなど、地域イベントにも活用されている。岬にある 2001 年に開館した奥尻島津波館付近には、2019 年 6 月 19 日から公開された新たな地図記号「自然災害伝

承碑」が示す「時空翔 (1998 年建立)」があり、同記号は北海道で初めての掲載となった¹⁵⁾。

Ⅲ. 青苗言代主神社例祭について

1. 例祭の概要

かつては島内の 12 地区で、例祭時に神輿や山車の巡行が行われていたが、現在までそのような伝統的な巡行形態を留めているのは青苗地区のみである。

神社は 1831 年に創立され、恵比須社と称されていたが、1869 年に言代主神社に改名された。神社の例祭の日程は毎年 8 月 12~14 日であり、12 日 (宵宮祭) と 13 日 (本祭) には社殿で神事が行われる。また、13 日と 14 日には、神輿や山車が連なって青苗地区内を練り歩く巡行が行われ、住宅を一軒一軒巡り、軒先で御祝儀の受け取りや飲食物が振る舞われる。1980 年代の巡行は先頭から、神様を先導する行列 (猿田彦)、神輿、樽神輿 (子供神輿) 3 台、山車 2 台 (恵比須山、船魂山) といった 7 つの要素で構成されていた (蟬塚ら 2020: 126)。巡行 2 日目の終盤が最も盛り上がる時間帯であり、神輿が神社の前を往復する「七五三」を行っていた。山車には、家々を巡る際にニシン漁の網起こしの音頭を起源とする「ハオイ」をかけてまわるという特徴が見られる。震災前、青苗地区では水産業が主要産業だったこともあり漁師の信仰が特に厚く、漁師が主体となって行う活気溢れる例祭だった。

震災によって神社社殿や祭器具、神輿、山車などのほとんど全てを焼失・流失したため、巡行は 6 年間の中止に陥ったが、住民の生活の復興が一段落した後、徐々に再開されていった。神社社殿に関しては、第 61 回伊勢神宮式年遷宮の際に解体された古材を使用し、宮大工によって 1995 年に再建された。また、同年に社名を青苗言代主神社に変更し、10 月 6 日には本殿遷座祭が行われた。その後、1998 年に奥尻町が完全復興宣言を行ったこと

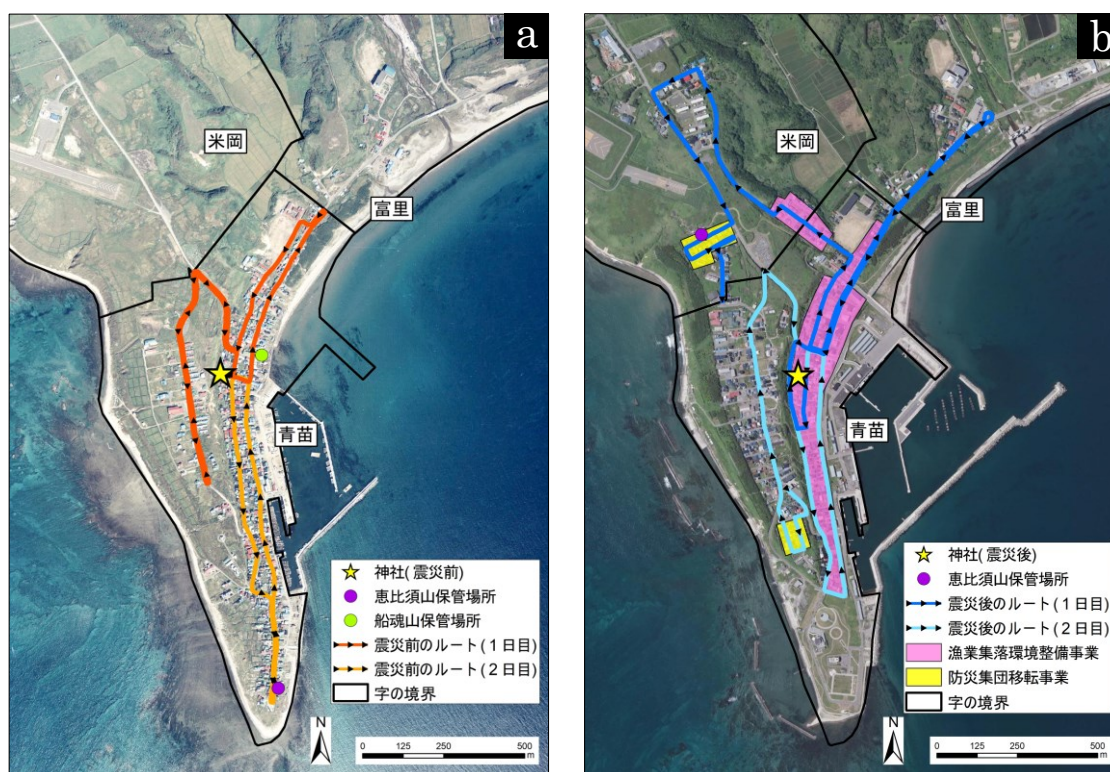
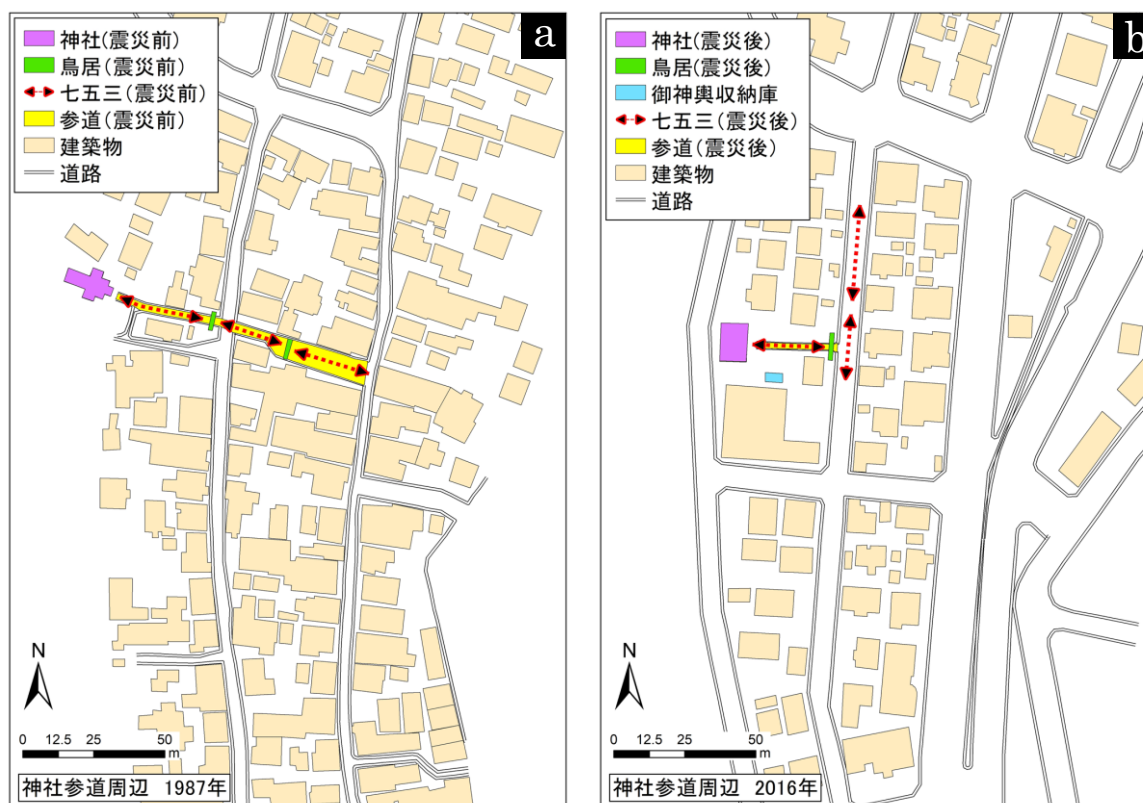
図4 震災前後の例祭に関する変化の比較¹⁶⁾

図5 震災前後の神社参道周辺の変化

を契機に、住民の間で巡行再開の気運が高まった。かつて2台あった山車は、災害復興基金を用い、

足まわりと人形は対岸の江差町、本体は福島県の協力で、1998年に1台（恵比須山）のみ制作され

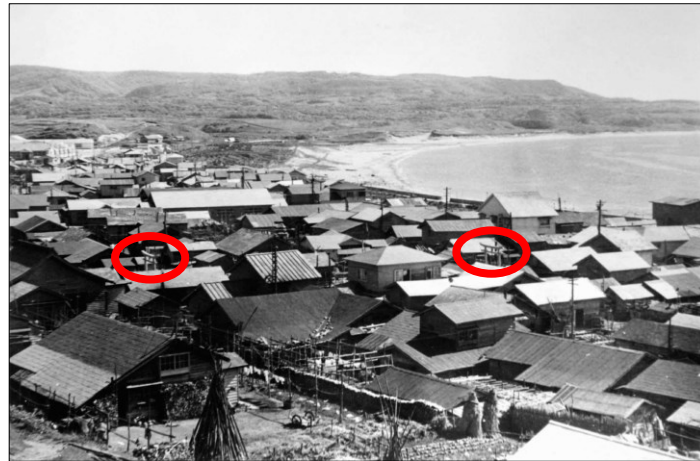


図 6 震災以前の鳥居（奥尻町教育委員会提供）

た。また、1999 年の 1 年のみ神輿の代わりとして、震災の被害を受けた磯舟の中から状態の良いものを選択し装飾を施した磯舟神輿が使用された。神輿は、有志から寄付を募り、2001 年に本体は富山刑務所で、彫刻は「井波彫刻」の職人によって制作され、同年から渡御が行われた。現在の巡行は先頭から、行列（猿田彦）、神輿、山車 1 台（恵比須山）であり、震災前の 7 つよりも大幅に簡素化され 3 つの要素となっている。担い手は漁師が減少し、公務員や会社員が増えている（蟬塚ら 2020: 126）。

2. 震災前後の例祭の比較

地図を用いて、震災前後の例祭を比較すると、以下の 2 点が挙げられる（図 4）。1 点目は、巡行ルートが震災前は字青苗内で完結していたが、震災後には隣接する字米岡と字富里まで延長された。震災以前に字青苗に住んでいた住民が、復興計画によって他字に移住したため、そのような住民の元を訪れるためである（蟬塚ら 2019: 166）。2 点目は、山車の保管場所が、震災前は低地下位面にあり津波によって流失したため（図 4-a）、震災後は土地の高さを重視し、内陸の高台に移動した（図 4-b）。

図 3-a,b では建物が過度に密集していることから、「総描建物（大）」で表記されており、個々の家屋の平面的な重なりを把握できない。したがって、

より詳細な住宅地図を用いて神社参道周辺のまちなみを明示したのが図 5-a,b である。両地図は GIS の機能で重ね合わせたものであり、同じ範囲を示している。神社が震災後もほとんど同じ場所に再建されているのは、震災時に津波被害ではなく火災によって焼失し、その後復興計画によって道幅が広がり住宅の密集度が低下したことから、類焼の危険性が低くなっていると判断されたためである。

参道周辺については、震災前後で以下 2 点の変化が見られる。1 点目は、神社から海の方（東）に向かって一直線に伸びていた参道が約 3 分の 1 に縮小した。住民からは、「震災前には鳥居が 2 基あった」¹⁷⁾ や「神社の参道にある鳥居は、本通りに 1 基、その 50m くらい西にもう 1 基あった」¹⁸⁾ など、現在は鳥居が 1 基のみとなっている参道の景観変化を示す証言があった（図 6）。参道の短縮について、「元のまちなみである、鳥居 2 基のストレータな参道が作れなかった」¹⁹⁾ や「神社らしくない。華やかさが無い」²⁰⁾、「参道は欲しかったな」²¹⁾ という証言もあり、現在でも以前のような長い参道を懐かしむ声がある。復興時に従来の参道が再現できなかった理由として、「公共の道路整備は国の補助事業の対象だが、参道は専用道であったため対象外となる恐れがあった」²²⁾ という証言がある。結果的に参道整備よりも生活再建を優先してしまったことになる。

参道の変化に関わる具体的なエピソードとして、神輿渡御における「七五三」が挙げられる。「七五三」は巡行 2 日目の例祭終盤で行われるもので、震災前は神輿が参道下の住宅前から 1 つ目の鳥居までの間で 7 回、1 つ目の鳥居から 2 つ目の鳥居までの間で 5 回、2 つ目の鳥居から神社社殿までの間で 3 回往復するものであった。しかし、震災後は神輿が神社前で 7 回、神社正面で 5 回、参道で 3 回往復するものに变化した。担ぎ手の減少も影響し、従来通りの形態になっておらず、「ここ数年はしていない。そもそも震災前のような七五三ではない」²³⁾ や、「昔は神輿を担いで神社にまっすぐ入っていたが、今はもう直角に曲がらなくちゃいけない」²⁴⁾ という証言がある。たしかに図 5-a,b で示したルートからもわかるように、参道の構造上、震災以前の長い参道を活かした東西の動きから、震災後は南北の町道から直角に曲がり、参道に入って東西の動きをするようになり、街路の構造上、震災前の伝統的な「七五三」の動作は不可能となった。

2 点目は、復興計画の中で住宅の密集度が緩和され、道幅が広くなった。「現在はまちなみが変わってしまい、賑やかさに欠ける。震災前は道幅が狭く、大勢集まって騒ぐことができた」²⁵⁾、「震災前は道幅が狭くて山車が通ると通行止めになるほどだった。道幅が広がり、臨場感が弱まった」²⁶⁾ という住民の証言から、道路拡幅によって例祭の臨場感や盛り上がりが減衰したことがわかる。さらに、「商店街は 1m 間隔くらいで建物がびっしり並んでいた」²⁷⁾、「昔は道が狭かったので、神輿があまり横に動く必要がなかった」²⁸⁾ という証言がある。震災前の奥尻町の漁村集落は、窓を開けると隣家に手が届くほど住宅が密集しており、道幅は約 3m で車がすれ違えないほどだったため、復興時はそれらを改善し、災害時の避難路確保や火災時の延焼対策が行われた（藤沢 2015: 451）。神輿は住宅一軒一軒の玄関先を巡ることを基本としているため、震災前は直線的に移動していたが、現



図 7 神輿の彫刻（佐々木理子撮影）

在はジグザグに進行している。災害対策は進んだ一方で、参道や鳥居周辺の神社景観の劇的な変化により住民にとって例祭の迫力は著しく低下した。

3. 例祭に見られる災害の記憶

現在、例祭において震災経験を伝承するものとして、神輿に施された彫刻がある（図 7）。震災後に神輿が富山刑務所で制作された際、江戸時代に京都から富山県南砺市井波に伝わったとされる井波彫刻²⁹⁾で著名な彫刻職人である南部白雲氏のご厚意で龍が鯰を押さえつけている彫刻が施された。この彫刻には、「地震が来ないように」という願いが込められており、島外から来た高校生や例祭を見物する人々に対し、地元住民が彫刻の由来を説明することで震災経験を伝える資源として役立てられている。

青苗地区に見られる震災経験を伝承する媒体である「津波館・時空翔（以後、「津波館」とする）」と、「青苗言代主神社例祭」を比較したのが表 2 である。各対象について、「津波館」は島の観光シーズンを含む 6 月 2 日～10 月 31 日の期間しか開館していないこともあり、災害リスクが高い地元住民よりも観光客が多く訪れている。それに対し、例祭は観光客よりも地元住民が多く参加している。

「津波館」は震災の伝承が主な目的であるが、例祭は地元住民によって古くから行われてきた年中行事である。特徴として、「津波館」は震災の悲劇性を伝え、例祭は日常生活文化で娯楽性が強

表 2 震災情報を伝える 2 つの媒体の比較

	津波館・時空翔	青苗言代主神社例祭
対 象	観光客中心	地元住民中心
目 的	震災の伝承	地元住民の年中行事
特 徴	震災の悲劇性	日常生活文化・娯楽性
災 害 描 写	教訓調	限定的
課 題	継続性	震災を伝える要素が弱い

い。災害描写に関して、「津波館」は将来の災害への教訓を得るものであり、一方例祭は災害描写が限定的である。それぞれの課題として、まず「津波館」の周辺では、かつて奥尻町主催の北海道南西沖地震の追悼式が屋外にあるモニュメントの時空翔で行われていたが、財政難³⁰⁾などを理由に、震災から 20 年の節目である 2013 年で役割を終えた。図 3-d で示した「自然災害伝承碑」のように過去の災害の教訓を取り入れる気運が高まる中、慰霊祭が終了すると災害の継続的な伝承が困難となる。このように、災厄後の公的な慰霊行事の継続性には難点がある。例祭に関しては、震災経験を伝える要素は先述した神輿の「龍と鯀の彫刻」以外にはほとんどないことから、今回提案した「記憶地図」などを用いて震災による影響の大きさを伝えていくことが求められている。行政によって維持される行事や施設での主に観光客を対象とした災害伝承に依存するばかりでなく、住民主体で継続的に行われている例祭のような場面でこそ災害経験の継承を長期間安定的に行うことが可能となる。

IV. まとめ

本論文 I-1「研究の背景」の前半で述べたように、先行研究では、後世の誰かが祭礼の将来を考えるための「材料」を残すことの重要性や、復興時に災害以前の暮らしとの連続性に着目する必要性が指摘されている。青苗地区の例祭においても、若い世代に例祭を今後どのように伝えていくのかという判断材料を残すために、過去の例祭の様子や震

災前後の差異を伝える必要があり、それを円滑に行うために「記憶地図」が有効である。渡御ルートや参道の変化を図示し、その上に住民の想いを重ね合わせるという「記憶地図」の利点を活かすことで、元通りに復興したと考えられていた例祭に、予想以上の変化が生じていたことが判明した。渡御を構成する要素が半減しただけでなく、とりわけ神社周辺における「七五三」の動作も大幅に変更を余儀なくされ、例祭の臨場感が損なわれたという数々の証言を、視覚的な把握によって立証することができた。震災復興計画上は、神社景観など文化歴史的側面は全く考慮されておらず、アイデンティティの源泉たる地域の文化遺産ともいべき例祭を復興する上での支障となった。したがって、日本国内において頻発している突発的な災害などから地域文化を再構築（「祭礼復興支援」）する際には、伝統的な祭礼景観に充分配慮した復興計画を練るべきである。

本論文 I-1「研究の背景」の後半で触れたように、先行研究において、祭礼などの娯楽的な行事と、防災や災害経験を結びつけて継承することの有効性が示されているが、一方で公的な行事による継続の困難性も指摘されていた。青苗地区の例祭は、住民らが自主的に行う娯楽であり、「龍と鯀の彫刻」が施された神輿によって、例祭自体で震災経験を継承している稀有な事例である。しかし、地元住民の指摘にもあった通り、かつての例祭の様子や復興時の情報を意識的に継承していかなければ震災と例祭に関する記憶が消失してしまいかねない。震災前後の神社や祭器具の復興場所・保管場所に

関しては地元住民が普段意識していない情報であるが、「龍と鯨の彫刻」を用いたこれまでの継承形態に加え、GISを用いて被災地域や巡行ルート、山車の保管場所、祭礼景観といった震災前後の例祭の変化を「記憶地図」上で総合的に可視化し共有することによって、災害への備えを肯定的に評価することになる。そのことは、本論文Ⅰ-2「研究の目的」において波及効果として挙げた「災害継承」と防災意識の向上にも繋がり、他地域にも適用可能である。

アーカイブの1つの手法である「記憶地図」は、住民の主体的な情報を地図上に重ね合わせ、個人が持つバラバラの記憶を統合することを可能にする。2020年9月下旬から10月上旬に神社周辺に特化した「記憶地図」を示しながら聞き取り調査を行ったところ、過去の記憶が鮮明に蘇り、活き活きとした証言が発露する場面に立ち会えた。地元住民自らが地図に書き込みを入れるなどしたため、アナログとデジタル双方で随時更新し、活用しやすい形に加工することの重要性を期せずして知ることになった。さらに、「記憶地図」の情報を地元住民と共有した際、住民同士が互いに情報を確認し合い復興過程を振り返ることで、過去の例祭との違いが鮮明になり、現在の例祭を見つめ直している様子が見られた。「記憶地図」を作成する過程で、住民同士が対話し、情報を共有しながら、震災以前から震災を経て何が復興でき、何ができなかったのかを認識することは、被災経験をポジティブに位置付け、例祭が青苗地区の中で果たす役割を見いだし、「災害継承」を促すことに結びつく。「記憶地図」には災害を意識的に継承（「災害継承」及び防災教育）するツールとしての役割も期待できる。青苗地区の例祭は地域の娯楽的行事を利用した防災活動の1例と位置付けられ、震災前のかつての例祭の姿と共に伝承することは、いずれ再来することになる自然災害への対応や、これからの例祭の方向性を検討するための拠り所になるだろう。

個人や組織に内在した新旧例祭の記憶は「記憶地図」によって外部化され、それらを通してさらに記憶は上書きされ強固なものとなっていくに違いない。高齢世代と若い世代が「記憶地図」を囲んで主観的な想いも含め、自由に話し合うワークショップの機会は、2020年10月以降はコロナ禍のため実現できていない。実質的なワークショップの開催とそれを継続していくことが今後の課題として残されている。収束した頃、例祭に関わる3組織のメンバーと共に、奥尻町の学芸員と連携しながらワークショップの機会を設け、若い世代に古い例祭を積極的に紹介したい。震災によって生じた新旧例祭の著しい差異を新旧両世代が実感することで、災害・防災の意義を噛みしめることができるだろう。

謝 辞

調査にご協力いただいた青苗地区の皆様と心より感謝いたします。さらに、匿名の査読者からは非常に示唆に富む有益なご助言を多数いただきました。深く感謝いたします。

日頃から多くのご指導をいただいている奥尻町教育委員会事務局学芸員・稲垣森太氏、北海学園大学人文学部教授・手塚薫先生、同校講師・谷端郷先生にあらためて謝意を表します。

注 記

（証言者に関する情報は、仮名／性別／年齢／職業／例祭での役割、不明は一で記す）

- 1) 青苗地区は、奥尻町の行政区である青苗1区～8区を指す。
- 2) A氏／男性／60代／特殊公務員／恵比須山協賛会・氏子総代
- 3) B氏／男性／70代／—／元氏子総代
- 4) C氏／男性／70代／小売業／青苗みこし保存会・氏子総代

- 5) B 氏／男性／70 代／一／元氏子総代
- 6) 福井フェニックスまつり公式ホームページ <http://fukui-fes.com/history/> (2020 年 12 月 19 日閲覧)
- 7) 海成段丘とは、過去、海成平坦面が上昇し、海岸線に沿って階段状の地形を示すものである (日下 2007: 30)。
- 8) 奥尻町提供の「行政区別集計表 (2019 年 10 月 31 日作成)」より。
- 9) 奥尻町提供の年齢性別データ (2019 年 6 月末集計) より。
- 10) 奥尻町提供の「行政区別集計表 (2019 年 10 月 31 日作成)」より。
- 11) 奥尻町提供の「行政区別集計表 (2019 年 10 月 31 日作成)」より。
- 12) 奥尻町提供の住民基本台帳データ (6 月末集計) より。
- 13) 「総描建物 (大)」とは、建物が密集し個々の建物を区別して表示することが困難な場合に数個以上の建物をまとめて表示するもので、建物密集地域の短辺が 25m 以上のものを大、それ未満を小としている (日本地図センター 2016: 12)。
- 14) 奥尻町ホームページ「奥尻町の津波対策」<http://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00001065.html> (2020 年 9 月 26 日閲覧)
- 15) 国土交通省国土地理院ホームページ「北海道南西沖地震の「自然災害伝承碑」を地図で公開」https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/bousaichiri190711_00003.html (2020 年 9 月 30 日閲覧)
- 16) 米国 Esri 社主催の「第 9 回 Esri Young Scholars Award」受賞時の地図に凡例の情報を付け加え、日本語訳したものである。<https://storymaps.arcgis.com/stories/81e7ed8d2eb44bd590d7a69336582e77> (25/27) (2020 年 10 月 10 日閲覧)
- 17) D 氏／男性／70 代／一／青苗みこし保存会
- 18) E 氏／男性／60 代／一／青苗みこし保存会・氏子総代
- 19) A 氏／男性／60 代／特殊公務員／恵比須山協賛会・氏子総代
- 20) C 氏／男性／70 代／小売業／青苗みこし保存会・氏子総代
- 21) D 氏／男性／70 代／一／青苗みこし保存会
- 22) F 氏／男性／60 代／一／氏子総代
- 23) D 氏／男性／70 代／一／青苗みこし保存会
- 24) C 氏／男性／70 代／小売業／青苗みこし保存会・氏子総代
- 25) G 氏／男性／40 代／公務員／行列
- 26) H 氏／女性／一／小売業／一
- 27) I 氏／男性／60 代／一／一
- 28) J 氏／男性／60 代／一／青苗みこし保存会
- 29) 朝日新聞記事データベース「浅草寺 ご縁あって「扁額」新調」2019 年 4 月 27 日夕刊 007 ページ
- 30) 日経新聞オンラインデータベース「北海道南西沖地震 20 年 奥尻、教訓を胸に避難訓練」2013 年 7 月 12 日夕刊 014 ページ

参考文献

- 相澤 亮太郎 2005 「阪神淡路大震災被災地における地蔵祭祀一場所の構築と記憶」『人文地理』57(4): 62-75.
- 明上 雅孝 2003 「北海道南西沖地震後の奥尻島青苗地区における住民のまちづくり活動」若林佳史 (著)『災害の心理学とその周辺—北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ—』多賀出版、東京、341-373.
- 渥美 公秀 2014 『災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミクス—』弘文堂、東京.
- 阿部 浩一 2019 「歴史資料保全活動の意味と可能性を問いつける—ふくしま歴史資料保存ネットワークの活動を通じて—」大門正克、岡田知弘、川内淳史、河西英通、高岡裕之 (編)『「生存」の歴史と復興の現在—3・11 分断をつなぎ直す—』

- 大月書店、東京、30-54.
- 安藤 昭、佐々木 栄洋、岩佐 正章、赤谷 隆一 1996「奥尻島青苗地区住民による津波被災後の地区環境評価からの復興計画案に対する検討」『農村計画学会誌』4(4): 16-25.
- 板谷 直子(牛谷 直子)、中谷 友樹、前田 一馬、谷端 郷、平岡 善浩 2015「「記憶地図」による無形の文化遺産の現状と継承の課題—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—」『歴史都市防災論文集』9: 73-80.
- 板谷 直子(牛谷 直子)、谷端 郷、中谷 友樹 2017「「記憶地図」を用いた無形の文化遺産の再生—宮城県南三陸町志津川地区における地域の祭礼を事例として—」『歴史都市防災論文集』11: 223-230.
- 奥尻町史編さん委員会 1969『奥尻町史』奥尻町、奥尻.
- 奥尻町役場 1996『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町役場、奥尻.
- 奥尻町役場 2003『新 奥尻町史(下巻)』奥尻町役場、奥尻.
- 河角 直美、板谷 直子、中谷 友樹、佐藤 弘隆、谷崎 友紀、前田 一馬 2017「記憶地図から読む地域の景観の歴史—仁和寺門前地域を例に—」『ランドスケープ研究』81(1): 22-25.
- 日下 哉 2007『図解 日本地形用語事典(増訂版)』東洋書店、東京.
- 黒崎 浩行 2019『神道文化の現在的役割—地域再生・メディア・災害復興—』弘文堂、東京.
- 佐々木 理子、蟬塚 咲衣、稲垣 森太、手塚 薫 2019「記憶地図作成による地域情報の可視化—奥尻島谷地地区における事例—」『北海道民族学』15: 45-54.
- 蟬塚 咲衣 2019「震災前後の青苗言代主神社例祭について」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』31: 45-51.
- 蟬塚 咲衣、佐々木 理子、稲垣 森太、手塚 薫 2019「北海道南西沖地震における奥尻島青苗言代主神社例祭の復興過程をめぐる考察—GIS による祭礼ルートと時間の変化が意味するもの—」『歴史都市防災論文集』13: 163-170.
- 蟬塚 咲衣 2020「2019 年の青苗言代主神社例祭の現状とこれから」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』32: 34-45.
- 蟬塚 咲衣、稲垣 森太、手塚 薫 2020「地域課題に直面する奥尻島青苗言代主神社例祭とその対応」『歴史都市防災論文集』14: 123-130.
- 全国消防長会 1994『北海道南西沖地震調査報告書』全国消防長会、東京.
- ゼンリン 2016『ゼンリン住宅地図 北海道奥尻町』ゼンリン株式会社、北九州.
- 田仲 桂 2016「いわき市における無形民俗文化財の継承の取り組み—「三匹獅子舞」の事例より—」『地方史研究』384: 55-61.
- 谷端 郷、板谷 直子(牛谷 直子)、中谷 友樹 2018「被災後の町の復興を支える神輿渡御—宮城県南三陸町保呂羽神社の春祭り—」『歴史都市防災論文集』12: 193-200.
- 手塚 薫 2020「祭礼の可視化と記憶地図」『北海学園大学学芸員課程学事報告書』32: 46-54.
- 日本地図センター 2016『地図記号 500』日本地図センター、東京.
- ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 研究戦略センター研究調査部 2019「地域コミュニティの防災力向上—インクルーシブな地域防災へ— 研究調査報告書」
<https://www.hemri21.jp/contents/images/2019/07/d84d9a933d42f0264309a9e43a882c20.pdf>(2020 年 12 月 25 日閲覧)
- 藤沢 直樹 2015「北海道奥尻町における復興住宅地の整備—北海道南西沖地震による津波被害から 20 年を経た奥尻町への視察から—」『農村計画学会誌』33(4): 450-452.
- 三木 英 2020『被災記憶と心の復興の宗教社会学—日本と世界の事例に見る—』明石出版、東京.
- 三好 眞澄、太田 陽子、澤 祥、今泉 俊文、鹿島

薫 1985「北海道奥尻島の完新世海成段丘」『地理学評論 Ser.A』58(9): 596-608.

矢野 桂司、佐藤 弘隆、河角 直美 2017「市民参加型 GIS による祭礼景観の復原—昭和 30 年以前の京都祇園祭の山鉾行事における松原通一」若

林芳樹、今井修、瀬戸寿一、西村雄一郎（編著）『参加型 GIS の理論と応用—みんなで作り・使う地理空間情報—』古今書院、東京、118-124.

（投稿: 2020. 10. 14）

（受理: 2021. 02. 02）